

# アナフィラキシー

英語名 : Anaphylaxis

## A. 患者の皆様へ



ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるものではありません。ただし、副作用に気づかずに放置してしまうと症状が重くなり、健康に影響を及ぼすことがありますので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行う上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身やご家族に「副作用の初期症状」という副作用の黄色信号があることを知っていただき、このような症状に気づいたら、すぐに医師あるいは薬剤師に連絡ください。

「アナフィラキシー」は、じんま疹や目のかゆみなどの皮膚・粘膜症状、息苦しさなどの呼吸器症状、腹痛や嘔吐などの消化器症状、胸痛、頻脈や血圧低下などの循環器症状が複数の臓器に同時にあるいは急激に出現する過敏反応で、医薬品によって引き起こされる場合があります。造影剤、血液製剤、抗菌薬、抗がん剤、解熱消炎鎮痛薬、一般用医薬品（市販薬）などでみられる場合があるので、何らかのお薬を使用していて、次のような症状がみられた場合には、近くにいる医療スタッフに申し出るか、すみやかに医療機関を受診してください。

**「全身の強いかゆみ」、「まぶたや唇の腫れ」、「持続する咳込み」、「ゼーゼーする呼吸」、「息苦しさ」、「持続する強い腹痛」、「繰り返す嘔吐」、「どうき」、「ふらつき」**など

※アナフィラキシーを疑う場合は、直ちに救急車で医療機関を受診してください。

## 1. アナフィラキシーとは何ですか？

食物、ハチ毒、医薬品などにより、全身の過敏反応が急激に出現することをアナフィラキシーといいます。その中でも、血圧の低下を伴う意識レベルの低下（呼びかけに反応しない）や脱力を来すような場合をアナフィラキシーショックと呼びます。

医薬品が原因の場合、多くは投与開始から 30 分以内にアレルギー症状が出現します。年間で 1,000 例以上発生していると推測されており、特に以下の医薬品で多く発生しています。

- ・ 造影剤
- ・ 血液製剤
- ・ 抗菌薬
- ・ 抗がん剤
- ・ 解熱消炎鎮痛薬

食物アレルギーをお持ちの方は、以下の医薬品でもアナフィラキシーを起こす可能性がありますので、注意が必要です。

- ・ リゾチーム塩酸塩（卵）
- ・ タンニン酸アルブミン（乳）
- ・ 乳糖含有製剤（乳）
- ・ 乳酸菌製剤（乳・大豆）
- ・ 経腸栄養剤（乳・大豆）など

## 2. 早期発見と早期対応のポイント

医薬品の投与開始直後から 10 分以内に生じることが多く、概ね 30 分以内に症状があらわれます。注射薬では症状発現が特に早く、内服薬ではやや遅れる傾向があります。過去に複数回、安全に使用できた医薬品でも、アナフィラキシーを発現することがありますが、初回投与時に生じることがあります。

アナフィラキシーの主な症状には、次のようなものがあります。

1. 皮膚・粘膜症状：皮ふの赤み、じんま疹、目のかゆみ、唇の腫れ
2. 呼吸器症状：くしゃみ、せき、ぜーぜー、声のかすれ、息苦しさ
3. 消化器症状：腹痛、嘔吐、吐き気
4. 循環器症状とショック症状：胸痛、どうき、意識障害

注意事項として、重篤なアナフィラキシーの場合でも皮膚症状を伴わないこともあります。

これらの症状がみられ、医薬品を使用している場合には、近くにいる医療スタッフに申し出るか、すみやかに最寄りの医療機関を受診してください。

「息苦しさ」などの呼吸器症状や「顔色が悪い」などのショック症状がある場合は、一刻も早く治療しなければなりません。医療機関の外におられた場合には救急車を呼ぶことが大切です。

小児の場合には、大人のように症状が明確でない場合や、症状を正確に自分で訴えることができないために注意が必要です。何となく不機嫌、元気がない、寝てしまうなどということがアナフィラキシーの症状であることもありますので、大人よりも注意深い観察が必要です。

(参考) その他知っておいた方がよいこと

息苦しさなどの呼吸器症状がみられれば、まず、アドレナリン（エピネフリン）という薬の筋肉内注射を行います。一度アナフィラキシーを経験された患者さんでは、再度の曝露を避けるとともに、アドレナリン自己注射薬（エピペン<sup>®</sup>）の携帯を推奨しています。小児科、アレルギー科、皮膚科などの専門家にご相談ください。

すでにご自分でエピペン<sup>®</sup>（体重 15 kg 以上 30 kg 未満：0.15 mg 製剤、体重 30 kg 以上：0.3 mg 製剤）をお持ちの場合で医療機関外でアナフィラキシーを発症した場合、あるいは医療機関にいても医療スタッフのアナフィラキシー対応が遅れるような場合には、

エピペン<sup>®</sup>を自己注射することが必要です。エピペン<sup>®</sup>は図1のように使用しますが、具体的な使用法は医師から指導してもらいましょう。また一般向けエピペン<sup>®</sup>の適応（表1）に示した症状がひとつでもあればすみやかにエピペン<sup>®</sup>を使用してください。

アナフィラキシーでは急激に状態が悪化することがあります。時間が経過していても、何らかの症状があればできるだけ早急に医療機関に受診してください。

なお、アナフィラキシーを起こしやすい方は、他の医薬品でアレルギー反応の既往のある方、食物アレルギー、ぜんそく、アレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎、アナフィラキシーなどアレルギー疾患の既往のある方などです。

## 使用するタイミング

エピペン®は使用前後に注射針が見えず、安全性に配慮した自己注射薬です。

アナフィラキシーの徴候や症状を感じたときに、太ももの前外側に速やかに注射してください。

お尻や腕には絶対に注射しないでください。

もしも、誤ったところにエピペン®を使用してしまったら、直ちに最寄りの医療機関を受診してください。

ここではエピペン®注射液0.3mgを用いて使用方法を説明しています。エピペン®注射液0.15mgも同じ使い方です。

## アナフィラキシーがあらわれたら

### 誤注射を避けるために

オレンジ色のニードル（針）カバーの先端を指などを押し当てると、針が出て危険です。  
絶対に行わないでください。

危険ですので絶対分解しないでください。



## 1 準備



携帯用ケースのカバーキャップを指で押し開け、エピペン®を取り出します。

オレンジ色のニードル（針）カバーを下に向けて、エピペン®のまん中を利き手でしっかりと握り、もう片方の手で青色の安全キャップをまっすぐ上に外し、ロックを解除します。

- 青色の安全キャップをかぶせた状態では、バネが固定されており、注射針が不用意に飛び出さないようにになっています。使用時まで青色の安全キャップは取り外さないでください。
- 安全キャップを外した後は、誤注射を防ぐため取り扱いに十分注意してください。
- 絶対に指または手などをオレンジ色のニードル（針）カバーの先端に当てないように注意してください。
- 使用する前に青色の安全キャップが浮いていないか、注射器の窓から見える薬液が変色していないか、また沈殿物がないかを必ず確認してください。
- 青色の安全キャップを外すときに横向きの力を加えないでください。



注射器の窓から見える薬液が変色していたり、沈殿物が認められたりしないか定期的にご確認いただき、認められた場合は速やかに新しい製品の処方を受けるようお願いいたします。

## 2 注射

エピペン®を太ももの前外側に垂直になるようにし、オレンジ色のニードル（針）カバーの先端を「カチッ」と音がするまで強く押し続けます。太ももに押し付けたまま数秒間待ちます。エピペン®を太ももから抜き取ります。



- エピペン®の上下先端のどちらにも親指をかけないように握ってください。
- 太ももの前外側以外には注射しないでください。
- 投与部位が動かないようにしっかり押さえてください。
- 太ももにエピペン®を振りおろして接種しないでください。
- 緊急の場合には、衣服の上からでも注射できます。



### 介助者が投与する場合

太もものつけ根と膝をしっかり押さえ、動かないように固定してください。

## 3 確認

注射後、オレンジ色のニードル（針）カバーが伸びているかどうかを確認します。ニードル（針）カバーが伸びていれば注射は完了です（針はニードル（針）カバー内にあります）。



- オレンジ色のニードル（針）カバーが伸びていない場合は、注射は完了していませんので、再度、ステップ1~3を繰り返して注射してください。
- エピペン®の注射後は、直ちに医師による診察を受けてください。

## 4 片付け



使用済みのエピペン®は、オレンジ色のニードル（針）カバー側から携帯用ケースに戻します。

- 注射後は、オレンジ色のニードル（針）カバーが伸びているため、携帯用ケースのふたは閉まりません。無理に押し込まないようにしてください。

注射後、薬液の大部分（約1.7mL）が注射器内に残っていますが、再度注射することはできません。

エピペン®注射液を使用した旨を医師に報告し、使用済みのエピペン®注射器と青色の安全キャップを医療機関等にお渡しください。

図1 アドレナリン自己注射薬（エピペン®）の使い方および指導

表1 一般向けエピペン®の適応（日本小児アレルギー学会）

**エピペン®が処方されている患者でアナフィラキシーショックを疑う場合、  
下記の症状が一つでもあれば使用すべきである。**

消化器の症状	呼吸器の症状	全身の症状
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 繰り返し吐き続ける</li> <li>・ 持続する強い（我慢できない）腹痛</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ のどや胸が締めつけられる</li> <li>・ 声がかすれる</li> <li>・ 犬が吠えるような咳</li> <li>・ 持続する強い咳込み</li> <li>・ ゼーゼーする呼吸</li> <li>・ 息がしにくい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 唇や爪が青白い</li> <li>・ 脈を触れにくい・不規則</li> <li>・ 意識がもうろうとしている</li> <li>・ ぐったりしている</li> <li>・ 尿や便を漏らす</li> </ul>

エピペン®適応の患者・保護者への説明、今後作成される保育所（園）・幼稚園・学校などのアレルギー・アナフィラキシー対応のガイドライン、マニュアルはすべてこれに準拠することを基本とする。

### 文献1から引用

※ 医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、このホームページにリンクしている独立行政法人医薬品医療機器総合機構の「医療用医薬品 情報検索」から確認することができます。

<https://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/>

※ 独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく公的制度として、医薬品を適正に使用したにもかかわらず発生した副作用により入院治療が必要な程度の疾病等の健康被害について、医療費、医療手当、障害年金、遺族年金などの救済給付が行われる医薬品副作用被害救済制度があります。

（お問い合わせ先）

独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 救済制度相談窓口

<https://www.pmda.go.jp/kenkouhigai.html>

電話：0120-149-931（フリーダイヤル）[月～金]9時～17時（祝日・年末年始を除く）